



## 世界とつながる 教室

1年生全員で制作した絵をウガンダに送る前に、全校集会でお披露目

# 徳島とウガンダの子どもたちが 一緒に絵を制作!

ウガンダは日本から遠く離れた貧しい国。そう思っていた徳島県三好市立三野中学校の生徒たちが、今、絵の制作を通じて現地の子どもたちと交流している。きっかけとなったのは、ALT（外国語指導助手）として来日したダニエル・モーガン先生の提案だった。

## 先生のボランティア経験が 国際交流のきっかけに

徳島県西部に位置する人口約3万人の三好市。この地に流れる四国一の大河、吉野川の近くにあるのが三好市立三野中学校だ。

実は昨年、これまで縁のなかったアフリカ東部のウガンダと交流を始めた。そのきっかけをつくったのは、アメリカからやって来たALT（外国語指導助手）のダニエル・モーガン先生。彼は大学生の時、国際NGO「Freedom in Creation UGANDA」のボランティアとしてウガンダを訪れたことがある。「20年以上続いた内戦で、多くの子どもたちが無理やり武器を持たされて兵士になりました。私がボランティア活動をしたのは、そんな過酷な経験をした元少年兵が社会復帰するためのリハビリセン



ウガンダが直面している水不足が改善されるようにという願いも込めて、「水」をテーマにしたデザインに仕上がった

ター。彼らは紛争のせいで遊びを知らず、育つため、絵を教えることで心の傷を癒す手伝いをしました」とダニエル先生は振り返る。

その後、英語教師として経験を積むため来日し、2011年7月に三野中学校に赴任したダニエル先生は、ウガンダでの経験を生かし、日本の中学生が途上国について考えるきっかけをつくれなかと、ウガンダの子どもたちとの交流を提案した。そして、この提案に賛同した美術担当の伊丹尚子先生とともにその方法として選んだのは、一緒に一枚の絵を作ることで、何かモノを送るだけでは、1回限りで終わ

ってしまう。一方通行ではなく、生徒たちがウガンダの現状を知り、何ができるか考えることが大切だとダニエル先生たちは考えたのだ。

## 途上国への理解を深め 自分にできることを発見

しかし生徒たちにとって、ウガンダは聞いたこともない国。そこでは、ウガンダを含め途上国への理解を深めるため、先生たちは財団法人徳島県国際交流協会とJICAに出前講座を依頼することにした。2、3年生に対してはJICAの教師海外研修でモンゴルを訪問した川原恵子先生が、現地の生活や文化を紹介。東日本大震災後に世界各国から日本に届けられた支援についても話した。そして今回、絵の制作を担当することになった1年生には、JICAのウェブ教材を使って少年兵について説明したほか、シニア海外ボランティアとしてウガンダで活動した徳島県出身の青木茂芳さんが、紛争などの課題やその中で懸命に生きる人々の生活について講演した。

青木さんの話を聞いて、「私と同年代の子たちが兵士にさせられてしまったなんて、自分の生活からは想像できない」と増居奏美さん。また、



シニア海外ボランティアに参加した青木さん(左端)からウガンダの文化を学び、民族衣装を試着

「僕たちの地域は吉野川の水が豊富なので、ウガンダでは水不足で困っていると聞いて驚いた」と話す西佐古彪雅くんのように、自分の生活にウガンダを照らし合わせて考えた生徒も多かったようだ。

こうして現地について学んだ1年生は、美術の時間を利用して1クラスで1枚、計2枚の絵を制作。縦2メートル×横1メートルの大きな布に、一人一人が描いた絵を張り付けていった。富士山や五重の塔など日本文化を伝える絵もあれば、サッカーボールなど自分の生活を紹介する絵もある。

そして、生徒たちの絵で半分が埋め尽くされた2枚の絵はウガンダのリハビリセンターへ送られた。今度は空いているスペースに子どもたちが自分の国の文化や生活

の絵を張っていく。3カ月の制作期間を経て日本とウガンダを紹介し合う、一つの絵が完成したら、2枚のうち1枚はウガンダに残し、もう1枚は日本に送り返してもらい、校内に掲示する予定だ。

「遠く離れたウガンダの子どもたちと一緒に絵を作り上げられるなら、ぜひ描きたいと思いました」と谷紗江さんは話す。「彼らがどんな絵を描いてくれるか、わくわくします」と笑顔を見せる坂井亜美さん。ダニエル先生は、「ウガンダの子どもたちにも、絵を通して日本のことを知ってもらえます。そして日本の子どもたちが彼らのことを思っているというメッセージを伝え、少しでも内戦で受けた傷から立ち直る力になれば」と願いを込める。

今回の取り組みをきっかけに、給食委員会の生徒が世界の飢餓の状況を全校集会で発表し、生徒たちは途上国への理解をさらに深めている。「世界には10億人も飢えている人がいるから食べ残しはやめよう」「買うと値段の一部が途上国に寄付される商品を選ぶなど、自分ができることから始めたい」。世界に関心を持ち、人を思いやる大人になっしてほしい。彼らはきつと、ダニエル先生たちの期待に応えて成長してくれるはずだ。



日本文化や自分の生活を紹介する絵を一人一枚ずつ描く生徒たち。この小さな絵を集めて張り、一つの大きな絵にしてい



学生時代にウガンダでボランティア活動を行い、現地の人々と交流したダニエル先生(右)